住民真剣 津波に備え

大楽毛南地区 専門家招き集会

津波の専門家との対話を通じて釧路市大楽毛南地区の住民が防災への理解を深める集会が29日、地区内のさつき町内会館で開かれた。海に面し、阿寒川にも接する同地区は、津波浸水想定地区に指定されている。住民ら約70人が実効性ある災害対策を考えた。（山田宏茂）

西村助教（右）から津波の危険性について説明を受ける大楽毛南地区の住民たち

釧路地方気象台などによると、浜中町で1960年、チリ沖地震津波で11人が死亡、厚岸町では52年の十勝沖地震で3人が死亡するなど釧路管内でも過去に大きな津波被害がある。

対話集会を主催した北大科学技術コミュニケーター養成ユニットの隈本邦彦客員教授によると、同地区は海岸沿いに木造家屋が多く津波被害を受けやすい。住民の避難率を高めようと企画した。

同大地震火山研究観測センターの西村裕一助教が「世界の津波、大楽毛の津波」と題して講演。

20万人以上が亡くなった2004年のスマトラ沖地震などを例に「どんな大津波も高さや陸に遡上（そじょう）する長さに限界がある。高台や海から離れた所に逃げれば助かることを覚えて」と話した。

また、4町内会ごとに防災地図も作製。家から海岸までの距離や足の不自由な高齢者がいるかなど、地図に津波の危険度や災害への備えを書き込んだ。

市連合防災推進協議会の亀卦川（きけがわ）正一会長は「住民の防災意識は高いが、94年の北海道東方沖地震では避難勧告が出ても避難する人は少なかった。行動に結びつけていきたい」と話していた。

（C）北海道新聞社　無断転載、複製及び頒布は禁止します。